

国語科

詩教材の研究—検討とその指導

I 詩の扱い方についての一つの試み

白井宏

はじめに

この一文は、標題に掲げておいたように、研究発表ではなく、一つの実践報告あるいは問題提起である。

現代国語だけには限らないが、「自主教材」または「投げ込み教材」ということがよく言われる。そしてそれについてのすぐれた実践も多い。しかし、考えてみると、一つの教材単発で行なわれたのでは効果が薄いのではないだろうか。すなわち、自主教材から自主単元へ、自主単元作りへと進んで行くべきではないだろうか、と考える。

1. 新しい試みの方法とそのねらい

詩の扱い方、単元作りは、従来は、各個々の詩作品をアンソロジー的に寄せ集めて構成する、いわば作品論的扱い、あるいは、作家ごとに数篇ずつの作品を集めて構成する、いわば作家論的扱いが主であったようである。むしろその両者において、文学史的な配慮等がなされているというようなことはあったが。

そこで此度、第三の方法として、詩が描いているもの（ことがら）、詩人の立場などを基準としていくつかの作品を集め、配列し教材として扱う。いわば「主題論的扱い」、もっと適切な言いかたをすれば「題材論的扱い」とでも言うべきものを考え、実践してみた。対象は高校二年生である。

この試みのねらいは次の三点である。

- (1) 題材をしぼることによって、単元としてのまとまりができるのではないか。そして、その題材を生徒の意識の在り処とのかかわりの中で決めることによって、生徒の、詩に対する興味を深めることができるのではないか。
- (2) 同じような題材を扱いながら、それぞれが違った方法や思想を持ついくつかの詩作品を読むことによって、詩とは何か、という問題にも、今までとは違った方法で迫ることができるのではないだろうか。
- (3) 教科書所収以外の詩を読む場合の、新しい眼を育てることができるのではないだろうか。

2. 実践のあらまし

以上のような前提のもとに、次に実際の実践のあらましについて述べてみる。

1) 単元設定とその理由

主教材 「小景異情」より*	室生犀星
望郷五月歌	佐藤春夫
故郷の街*	三好達治
帰郷者	伊東静雄
帰郷*	萩原朔太郎

補助教材 詩論「断崖からの郷愁」* 村野四郎
◇*印を付けたものは本校が使用しているT書房版「現代国語二」所収のものです。

この5篇の詩を1つの単元にした。そして、この5篇の詩を共通する題材というのは、一言でいうと、「望郷」、故郷を望むということである。

なぜ「望郷」という題材を、この実践の単元設定の際に使用したか、ということであるが、その理由（あるいは条件）の1つは、生徒の意識の傾向ということである。紙数の都合で資料を掲げることはできないが結論的にまとめて言うと、生徒が好んだり、また、印象に残っている詩作品ということになると、それはやはり、抒情詩、しみじみと自分の心に語りかけ、しみ通り、そのあと何か考えさせる、そのようなものであるようだ。そして、そのような傾向をおさえたい、実際にいろいろと題材を考えてみたのである。「愛」「生と死」、「労働」、「生活」、「戦争と平和」なども考えてはみた。

そこで、「望郷」にした第二の理由、条件であるが先程示したように、5篇の詩のうち、3篇までが、現在使用している教科書に採用されているものである。つまり、若干便宜的で安易なようではあるが、最終的には、そういった点が、題材決定のポイントになったというわけである。さらに言えば、このT書房の教科書には、詩の単元の終わりの部分に、「詩論」として村野四郎の「断崖からの郷愁」という文が採られているが、この文を、「望郷」という題材でまとめた詩の単元の「導入」のための補助教材として使用できるのではないか、ということもあった。

また、第三の理由として、「望郷」という題材で

詩を集め、読むということになると、これは、好むと好まざるとにかかわらず、読み手としては、つまり生徒としては、その作者、詩人と彼の故郷、故郷とのかかわり、というようなことについて、調べざるを得なくなるのではないか。ということがある。これをもっと具体的に言うと、「小景異情」の正確な理解、鑑賞のためには（誤解を恐れず敢えて言えば、理解のための必要条件であり、十分条件ではないが）、金沢のこと、犀星と金沢の関係、といったことについてのある程度の知識が無ければ不可能、あるいは、そういう知識があったほうが理解、鑑賞しやすいということが言えるのではないかと思う。佐藤春夫と新宮、伊東静雄と諫早などについても同様のことである。

従って、こういう詩を教材として与えることによって、生徒は、一つの作品を理解するためにさまざまなことを調べる。そういう読みかたが、教師の押しつけでなく、習得できるのではないか、ということである。これは、一篇の小さな作品が、実は、さまざまな生活や、時代、歴史や、社会や、そういう大きな状況の中から、ある意味で必然的に産み落とされてくるということに対して理解する、というふうに言い換えることもできると思う。

またさらに、「故郷への思慕の情緒」は、同時に、肉親あるいは友人への愛情、友情であり、そしてそれは、それをてこととして、もつと大きなもの、国家、民族、社会、政治、戦争、そういったテーマ、題材へとつなげ得るのではないかという、漠然とした見取り図もあるにはあったのである。

さて、以上述べてきたような理由で、「望郷」という単元を設定したわけであるが、こうして見てくると実は此度の試みは、厳格な意味での自主単元とは言えぬかもしれない。と言うのは、自主単元と言うからには、やはり、その題材を設定する際に、例えば、高校2年生という段階の発達程度に即した場合、どういう題材を、どういう意図で、どういう形で与えるか、というようなことが、もっと厳しく検討されねばならない、と考えるからである。「望郷」でなければいけないのか、また、そういう題材が、高校2年生に対して最もふさわしいものであったのか、そういう点の突っ込みが足りなかったことは否定することができない。また、独自の題材のもとに編集し直したとはいえ、教科書にかなりの程度よりかかっているという点にも問題があると思う。

そういった理由で、此度の試みについてはわたくし自身、完全自主単元作りに至る道程上の1つのプロセスとして位置づけ、評価しているのである。このことは同時に、こんなふうに教科書のある程度利用しなが

らやって行く、そういう方法からしか始められないという、わたくし自身の力量に対する評価でもある。

次に、単元の中に、教科書教材以外から、佐藤春夫の「望郷五月歌」と、伊東静雄の「帰郷者」という2篇の詩作品を組み入れたことの理由について説明する。

先ず「望郷五月歌」についてであるが、この詩は、古典、特に和歌の世界をふんだんにちりばめたもので内容は、ほぼ完璧な故郷讃美のものであり、この種の詩の1つの典型として教材化したのである。これだけ明るくかげりのない故郷讃美の詩作品も珍しいのではないかと思う。

また、後者「帰郷者」については、特有な反語的表現というか、逆説的表現というか、そういうまっすぐでない、故郷に対する一つ屈折した観方がおもしろいのではないか、という理由で組み入れることにしたのである。

そして、これ以外にもいろいろな作品を考えてみましたが、そのことについては省略する。

2) 具体的授業展開についての報告

次に、実際にどのように授業を展開させていったかについて述べる。先程掲げたように、先ず、導入として、村野四郎の「断崖からの郷愁」という詩論を、講義の形式で2時間かけて実施した。この詩論の内容を要約しておく。これは村野が、自身の作詩法について論じた文であり、彼の詩作の主たるモチーフは、現実認識、もっと言えば、現実に対する批評意識である。そして、その現実とは、文明のちぐはぐな発達によって、内なる自己と外なる社会とが、つねに隔絶させられる危機をはらんでいるものである。そして、その崖の縁のような現実の非合理性の上に立っての「われ」と「社会」とが、一つに調和した世界への郷愁、あこがれ、そういうものが自分を詩の世界へ駆りたてるのだ、というような内容である。

この文を通して、生徒は、一人の詩人の作詩法のメカニズムを垣間見ることができたと同時に、この論の中の「具象性の陰に潜む思想的論理」ということばから、実際に詩作品を理解、鑑賞するうえでの一つの鍵を手に入れたようである。このことについては再び後に触れることにする。

さて、個々の詩についてであるが、各詩それぞれについて生徒3人ずつを割り当てて調べさせ、そのレポートを中心に、各1時間ずつという配当時間で実施した。

「小景異情」

この詩はほとんど全員が、今までに読んだり聞いたりの経験を持っており、最初にやる作品としては入

りやすかったようである。犀星がこの詩を作った場所すなわち、東京で作ったのか、金沢で作ったのかという議論でかなり時間を費しはしたが、「うらぶれて異士の乞食となるとても／帰るところにあるまじや」というような悲痛なことばや、冒頭の「ふるさととは遠きにありて思うもの／そして悲しくうたうもの」という甘悲しい抒情的なことばは、犀星の生い立ちとともに印象に残ったようである。

「望郷五月歌」

レポーターが解釈作業（註）にかなりの時間を使い、聞いている生徒にもペダンティックだという印象を与えたようである。しかし反面、何となく暗い詩が並んでいる中で、底抜けに明るい故郷讃美のこの作品を好む生徒もいたようである。

「故郷の街」

あまりにも短い作品であったために、詩そのものよりも、ほとんど旅の中で一生を終えた作者三好達治の生涯を、芭蕉のそれになぞらえたりして、そちらのほうに興味を覚えた生徒が多かったようである。レポーターがプリントした「乳母車」に感動を示した生徒も多かった。

「帰郷者」

かなり理屈っぽいし、そのうえその理屈が直線的でなく、反語的、逆説的であるので、レポーターの説明も、それを聞いて理解、鑑賞するほうも、かなり苦労したようであった。しかし、それ故に共感を示す生徒もいた。「美しい故郷は、それが彼らの実に空しい宿題であることを、無数の古来の詩の讃美が証明する」というこの一節について、ある生徒は次のような感想を書いている。「こんな表現が詩だと思います。宿題ってことばが、この単語の連なりの中で、キラキラ光っているようです。だから、私はこれが詩だと認めることができます。何か光ることばがあれば、それは詩です。」

「帰郷」

この詩が作られた時の作者朔太郎の状況がキッチリと報告されたので、文語ということばの制約をもあまり気にせずに理解できたようである。さらに、プリントで「郷土望景歌」なども紹介され、参考になったようである。

合計七時間の授業を終えた後、生徒1人1人に400字程度で自由に感想文を書かせたのであるが、それらの感想文を読みながら感じたことは、「故郷」ということばの持つイメージについて、生徒が今まで持っていたもの、つまり「故郷」＝魂の安らぎ、甘美な云々といったものに対して、何がしかの新しい見かたを付け加え得たのではないかということが一つである。イ

メージの拡がりの獲得ということは、すなわち、感性の豊かさの獲得だと言えると思う。ある生徒は次のように言っている。「故郷を愛するが故にまた憎まねばならず、また、憎悪が増せば増すほど故郷を思う気持は募るばかり、そんな彼らこそ、真に故郷を知っている人ではないだろうか。故郷は美しい、などと賞讃している人には故郷がわかってはいないのだと思う。美しく描かれた故郷にその真の姿はない。美しすぎるものの中に本当の美を感じることはできない。」

また、先程少し触れた村野四郎のことば、すなわち「具象性の陰に潜む思想的論理」ということばに助けられて、「ふるさと」というものを、犀星一金沢、朔太郎一前橋、というような具象的な固定的かかわりを突き抜けて、「ふるさとなるもの」という抽象的普遍的意味で捕え、そういう視点からこれからの詩をもう一読み返してみ、そういう作業を経ることによってこれらの詩を自分のものにして行く、ということをつめの成果としてあげたいと思う。詩の読みかたとしてはかなり高度なものであると思う。これも一つの感想文から抜き書きしてみる。これを書いた生徒は、大阪に生まれ、三才にならぬ時に東京へ引越し、その後転々として……という経歴の持主である。「こんな私でも甘いムードで故郷を歌った詩を読むとき、やはりいいなあと思う。本当の意味でのふるさとがなくても、心のどこかに、『ふるさとなるもの』へのあこがれのような気持が潜んでいるからである。そして幸福なことに、私の抱くふるさとへの淡いあこがれは、決して打ち破られることがない。なぜなら、実際にふるさとへ帰ることがないのだから」

3) 反省と将来の展望

「望郷」という単元名を選んだこと、そういう単元設定をしたことに関する問題点については、先にも触れた通りであり、仮りにその問題については今は措くとしても、実際に教材として、果してこの五篇の作品以外になかったか、という問題が残る。特にそういうことを感じたのは、達治の「故郷の街」についてである。また、「帰郷」についても、同じ朔太郎の作品を扱うのであれば先にも挙げた例えば「小出新道」や「大渡橋」など、もっと適当なものが、あったように思う。さらに、他の詩人の作品の中にも、いろいろと調べればもっと適当なものがあったようにも思う。やはり、いわば安易に教科書にもたれかかりすぎたということが言えると思う。

また、さらに考えてみると、実際には故郷を持たない生徒が大多数であるという状況を踏まえて、その上でなおかつ「望郷」という題材を、現実の生徒にもっと深いところでつなげ得るようという意図的な配

慮、言い換えれば、「故郷」というイメージをそういう方向でもっと膨らませるという努力が必要ではなかった。かとも思う。これも生徒の感想文の示唆による反省点である。ある生徒は次のように言っている。「どの詩人についても言えることだが、故郷の自然を背景として主張しているような気がする。背景にするだけの自然が彼らの故郷にはあったのだ。私には名古屋の自然が破壊されてしまった故郷しかない。」

さらに、最初に此度の試みのねらいとして掲げた三点についても、十分に成果があげられたかどうかは疑問である。それこそマンソロジーにすぎぬではないかという御批判もあると思う。しかし私にとってこのようなことは初めての試みであり、今後を期したいと思う。

おわりに

単元設定のところでも述べたように、私としてはこの実践の分析検討をもとにして、さらに、真に自主単元と呼び得るものを創りあげて行きたいと思っている。その手始めとして、中学校、高校併設校という本校の特質を活かして、先ず詩の単元作りを、中学一年生から高校三年生までにわたって行ないたいと思っている。紙数の都合でその結果を報告できぬが、そのための資料の一つとして、夏休みの宿題として、中学三年生・高校三年生を対象とし、各自それぞれ一篇ずつ自分の好きな作品を選んで、解説、鑑賞を付して提出させるということもやってみた。

そしてまた、「望郷」を主題としたこの試みを検討する中で、例えば「万葉集」(覇旅の歌、防人の歌等)あるいは漢詩、西欧の詩などもからめて扱えるのではないかなども考えてみた。これは、一つのねらいとしては、ともすれば解釈に追われてなかなか本質にまで迫り得ない古典や漢文の授業の動機付けとして考えるということであり、またこれは、夢のような話でどのように実現できるか、非常に困難なことであるが現状の、現代国語、古典、漢文という科目の枠を取り払って、その全体にわたるような単元設定を行ない、実践する、そういう構想も立て得るのではないか、ということでもある。

さらにまた、一つの単元を、文章形態(ジャンル)

の違うもの、例えば、詩や小説、評論、短歌等を取りまぜて、同じ題材のもとに編集し、構想する、そういうことも考え得るのではないかと思う。

(付) 教科書所収以外の作品二篇のうち、佐藤春夫の「望郷五月歌」は比較的有名なものである。次に伊東静雄の「帰郷者」を参考のために付しておく。

「帰郷者」

伊東静雄

自然は限りなく美しく永久に住民は
貧窮してゐた
幾度もいくども烈しくくり返し
岩礁にぶつかった後に
波がちり散りに泡沫になって退きながら
各自ぶつぶつ呟くのを
私は海岸で眺めたことがある
絶えず此処で私が見た帰郷者たちは
正にその通りであった
その不思議に一樣な独言は私に同感的でなく
非常に常識的にきこえた

(まったく、いまは故郷に美しいものはない)
どうして(いまは)だろう、

美しい故郷は
それが彼らの実に空しい宿題であることを
無数の古来の詩の讃美が証明する
曾てこの自然の中で
それと同じく美しく住民が生きたと
私は信じ得ない
ただ多くの不平と辛苦ののちに
晏如として彼らの皆が
あそ処で一基の墓となっているのが
私を慰めいくらか幸福にしたのである

同反歌

田舎を逃げた私が 都会よ
どうしてお前に敢て安んじよう

詩作を覚えた私が 行為よ
どうしてお前に憧れないことがあろう